

ハッピーバースデーに
願いをこめて

直井さよこ



直井さよこ（なおい・さよこ）

講談社X文庫

1959年12月21日、群馬県生まれ。血液型・O型。
東京在住。趣味は、音楽、観劇。好きな作家、
ポール・ギャリコ、ディケンズ。作品に「ラ
ストシーンはあ・な・た・と…」がある。



ハーフムーンに願いをこめて

直井さよこ

●

昭和63年6月5日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

本文印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

カバー印刷——半七写真印刷工業株式会社

デザイナー——山口 馨

©直井さよこ 1988

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についての
お問い合わせは、第三編集局企画部あてに、お願いいたします。

ISBN4-06-190191-5 (0)

(三企)

講談社X文庫

ハーフムーンに願いをこめて

：

直井さよこ



目次

第1章	恋の予感ハハプニング……………	6
第2章	思いがけない告白……………	26
第3章	不思議なこと……………	42
第4章	夢の中のランデブー……………	63
第5章	マイ♡スウィート♡デイ……………	87

第6章	真昼の対決……………	107
第7章	隠された秘密……………	131
第8章	そしてふたたび……………、ハプニング……………	155
第9章	恋の謎 ^{謎と} 解き……………	171
第10章	いとしのハーフムーン……………	185
あとがき……………		196

ハーフムーンに願いをこめて

第1章 恋の予感ハハプニング

「ごちそーさまっ！」

夕食のあと、アンナ姉さんが提案した。

「サトミ、明日は三人で豪華に高校入学のお祝いパーティーしょ」

「あ、それ、賛成！」

サキが、すかさず手を叩いて言った。

「パーティー!？」

あたしは当惑した。だけど、アンナ姉さんは、あたしに微笑みながら言う。

「まだ、サトミの合格祝い、してなかったでしょ」

それはそうだけど――。

あたしは、ぎごちない笑みを浮かべながらアンナ姉さんを見つめると、ためらいがちに言った。

「だって……、今はまだ、それどころじゃないもん」

「ママのこと、気にしてるの？」

アンナ姉さんに見つめられて、あたしは思わず、うつむいた。

「そりやそうよ。ママが死んでから、まだ一か月も経ってないのに、そんなの不謹慎じゃない？」

あたしの言葉を遮るようにして、アンナ姉さんは言った。

「あら、きつとママは、そういうの喜ばないわよ。サトミの人生の一ページとして記念すべき日が、ママとのお別れの日になっちゃったこと、あたし気にしてたのよ。ね、サトミ、明日は、あたしとサキで腕をふるうわよ」

「まかせてよ、サトミお姉ちゃん」

サキも腕まくりして、あたしに有無を言わせない。

ありがとう、アンナ姉さん、サキ……。

あたしの胸は、ジーンと熱くなった。

あたしは、三人姉妹の真ん中で、長女のアンナ姉さんと妹のサキと一緒に、都内のマンションで仲睦まじく暮らしてる。

あたしたちのパパは、いない。

ママも、いない。

パパは――。

あたしたち三人が幼い頃に他界した。

物心ついてから聞いたママの話によると、パパが死んだのは、三つ年下のサキが生まれてまもない頃だという。つまり、あたしが三歳のときなんだけど、記憶力の乏しいあたしは、ほとんどパパのことを覚えていない。

あたしでさえそうなんだから、サキにとって、父親に対する記憶は皆無に等しいはずだ。そんなあたしたち三人の娘を抱えて、女手ひとつで育ててくれたママも、半月前に交通事故故であつけなくこの世を去った。

余りにも突然過ぎて、あたしたちには悲しむ暇さえ与えられなかった……。

忘れもしない。

あれは、高校の合格発表の日だった。

あつた、あつた!!

自分の名前を見つけたあたしは、喜びで胸をいっぱいさせながら、誰よりも先に電話ボックスに飛び込んだ。

ところが、受話器を通じて伝わってくる呼び音だけがむなしく鳴り響くばかりで、いつこ
うに出る気配がない。

あせったあたしは、そのまま電車で飛び乗って家に帰ったのだけれど。誰もいない家の中には、病院に急行するように、というアンナ姉さんの書き置きがあった。

あたしが無我夢中で病院に駆けつけると、アンナ姉さんと妹のサキに見守られるなか、苦しそうに酸素マスクをしているママがいた。

「ママ、あたし、合格したのよ」

あたしがママの耳元でささやくようにそう言うと、ママはニツコリと笑みを浮かべて、そのまま息をひきとった……。

あのとき。

つい先刻まで、合格の喜びに浮かれてたあたしの心の中には、ポツカリと大きな穴があいてしまったような、空虚感しかなかった——。

あたしたちは、途方に暮れた。

だけど、ママは、もしもの場合を予測して、多額の生命保険に入っていた。

つまり、あたしたち三人には、莫大な遺産が残されたってワケ。

「これから、三人で力を合わせて生きていきましよう、ねっ！」

ママが死んでも涙ひとつこぼさないアンナ姉さんの固い決意の言葉に、あたしとサキが力強くうなずいたのは、まだ記憶に新しい。

そう、あの日以来。

あたしは、高校に合格しても、素直に喜んじやいけないような気がしていたし。実際、今までずっと、自分の気持ちを押し殺してきたんだもの。

その日の夜。

あたしは嬉しさのあまり、興奮してほとんど眠ることができなかった。

そして翌日。土曜日の午後。

あたしは心弾ませ校門を出ると、春の日射しを体じゅうで受け取めながら、駅への道を急いでいた。

昨日、アンナ姉さんにパーティーしよう、って言われてから、あたしの心はウキウキ、ゴムまりみたいに弾みっぱなしなんだ。

ホントは、まだ喪に服さなくちゃいけないんだけど。

許してね、ママ。

きょうだけは、あたしたち、ハメをはずしちやいそうなの。

あたしは、空に向かってつぶやいた。

「でも、ママのこと、忘れるわけじゃないよ」

（わかっているわよ）

どこからか、やさしいママの声が聞こえてくるような気がする。

「ママ……」

駅へと続く裏道をひとりポツネンと歩きながら、複雑な気持ちをかき消すように、あたしは目の前の小石を思いっきり蹴とばした。

コンッ。

「痛っ!!」

大きな悲鳴に顔を上げると、クラスメイトの潤一郎が、顔を手で押さえながら、うずくまっている。

あっ、潤一郎っ！

ど、どうして、ここに!?

あたしは瞬間、夢じゃないかと思ったけど、次の瞬間には、逃げだすことを考えていた。だって、だって。

高校に入学して以来、まだ一週間にしかないけど、潤一郎は、あたしが密かに恋が
れている憧れのヒト、なんだもの。

今、あたしの目の前にいるのは、まぎれもなく潤一郎で。

バツの悪いことに、あたしの蹴った小石がみごとに命中しちゃってる。

ふえ〜ん。

こんなとき、どうすればいいんだろつ。

よりによって、思いを寄せている人に、ドジをしちゃった場合――。

とにかく、あやまらなくっちゃ。

あたしはそう思ったけど、同じクラスといつても、ほとんど口をきいたこともないんだ。何かの拍子で近づいただけでも、赤面しちゃうくらいなんだもの。

でも今は、そんなことを言ってる場合じゃない。

あたしは、勇気をふりしぼると、ためらいがちに潤一郎に近づいて、すまなそうにあやまった。

「ご、ごめんなさい……」

「いや、いいんだ」

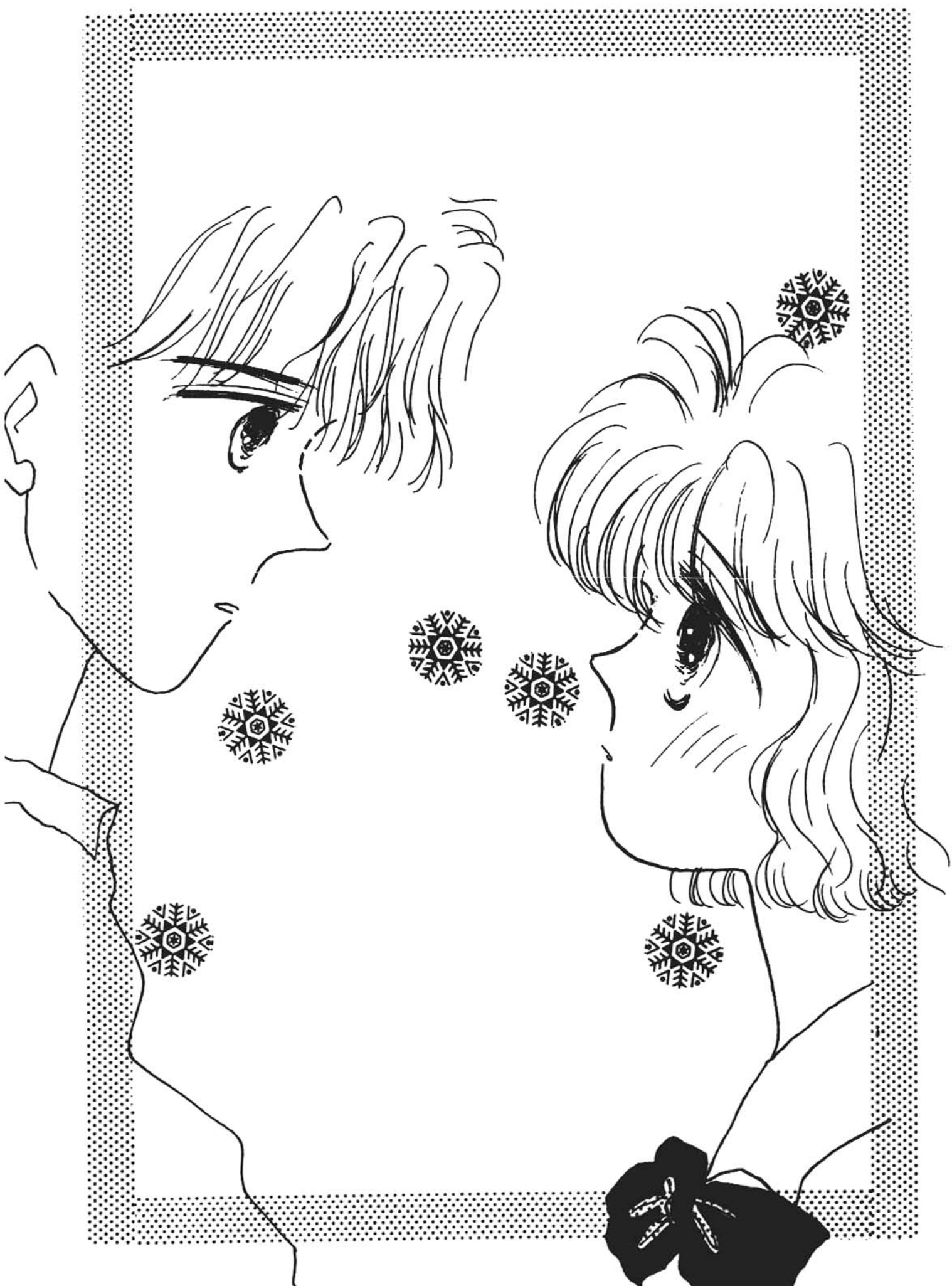
そう言いながら、顔をあげた潤一郎は、あたしの目をとらえて離そうとしない。びつくりしたように、目を大きく見開いている。

「あ、あの、あたし……」

あたし、同じクラスのサトミです、そう言おうとしたけど、憧れの人に見つめられたあたしはカーッと頭に血がのぼってしまい、そのまま言葉がとぎれてしまう。

あゝん、もうダメっ！

恥ずかしいっ！！



あたしの顔は、火がついたように熱くなつていった。

——と、突然、潤一郎は、あたしから目を離すと、フッと顔をそむけるようにして空中に視線を移した。

その目は、虚ろに見開かれ、片方のこめかみについたかすり傷からは血がにじみ出ている。

大変っ！

あたしは、カバンから急いでハンカチを取り出すと、潤一郎に渡そうとした。——けど、潤一郎は、身動きひとつしない。

変なトコ、打っちゃったのかな？

心配を装いながらも、潤一郎の尋常でない様子に恐怖を覚えたあたしは、顔からスウッと赤みが消えていくのを感じていた。

困ったな。

あたしは眉間にしわを寄せながら、当たりさわりのないように、やんわりと言った。

「だ、だいじょうぶ？」

あたしの言葉にピクンと体を動かすと、潤一郎は突然、両手を前に突き出して、あたしに抱きつこうとする。

キャッ、ど、どうしたの？

あたしは反射的に逃れようとしたけど、潤一郎の左腕が、あたしを力強く引きもどす。

「いやあ！ やめてよっ！」

あたしは、思わず金切り声をあげた。

その声に余程、驚いたのか、潤一郎は瞬間的に手の力をゆるめたみたい。今だっ！

あたしは潤一郎の左腕を振り切ると、一目散に駆け出していた。

追ってくる様子はない。

走りながら、あたしは背中につき刺さるような潤一郎の視線を感じていた。

潤一郎が、あたしの後ろ姿を見つめてる。

ううん。それはきつと、あたしの思い過ごしで――。

もう、いないに決まっている。

そう思いながらも、あたしは潤一郎の様子が気になった。

今にも振り返りたいっ！

だけど。

もしも、まだ潤一郎がそこにいたら。

やっぱり、ダメっ！

あたしは潤一郎と目を合わせるのが怖くて、そのまま、駅とは反対方向に走り続けて